

を図っているが、この索引に引きにくいところがある。例えば、『浅解英和辞林』、『英和英字彙大全』はそれぞれ「英和辞林」、「字彙大全」として登録されており、書名としてこれでは情報不足である。どうして少々重複してもそれぞれセの部とエの部、エの部とシの部で引けるようにしていないのかと思う。また分類についても、なぜ『蘭学階梯』や『幕末洋学者欧文集』などが自然科学の部に入っているのか、不可解なものが少なくない。

つぎに、文庫の利用法について、学外者の利用にあたって本学職員の紹介が必要というのはどのような理由によるのであろうか。学会関係の知人に神原文庫を利用したいのでと紹介を頼まれることがあるが、例えば紹介者になって貰おうと思っていた人が在外研究等で不在だということになると文庫を利用できないということになる。前以て図書館長あて利用許可願を出して許可を得るとか、国立大学図書館間共通閲覧証を携行していれば紹介がなくても利用できるとかいう方途を検討していただけないだろうか。

この文庫が多くの人に有効に利用されてこそ、これだけの書物を収集して日本の文明開化のあとをたどろうとされた神原先生の御遺志がいかされるものと信ずる。

国立国会図書館探訪

農学部助教授

井筒 勝彦

「としょかんだより」No. 8のP. 5の「J-BISC利用開始」の案内によると、香川大学に居ながらにして、本がある場合は、すぐ手に取ることができ、ない場合は、国会図書館より郵送により手にすることが可能とのこと、11月上旬、出張した機会に、本家の国会図書館に行ってみた。

国会図書館は、国会議事堂の東側に道路を隔てて建っているため、地下鉄（丸ノ内線、千代田線の国会議事堂前で下車）が便利であり、1時間が2時間あれば、最小限度の用は足りる。丁度、国会の会期中で3、4人づつグループのおまわりさんが、門という門、角という角にうろうろしていて少々目障りであったけれど、歩道や街路樹も、以前より数段美しくなり、議事堂内、議員会館、

図書館などの構内の植木も大きく成長し、整備もされ、散策するのも悪くないが、キョロキョロしていると、例のおまわりさんもいるし、お上りさんと間違われるから御注意！

本館はただ四角だけの建物だが、中庭と新館（内部も）は大変美しい。さて、図書については、総記類の参考図書や、官庁・国際機関資料など、大部分の書籍は開架式で、カードかパソコンで検索して請求票を作成して、カウンターに提出すれば、数分で借りられるようだ。

昭和61年12月末現在、蔵書が437万冊、1月平均閲覧人員1,821人とのこと。十分の広さがあるので、そう混んでる感じはしない。但し、年齢制限があり、満20才以上でないと利用出来ない。一般研究室は（学部の学生は利用出来ない）研究テーマを記載して登録すれば1年間有効で利用出来る。閲覧時間も9：30～17：00だが、一般研究室は20：00（土曜日17：00）までと優遇されている。

国会図書館は、私の学生時代には前の赤坂離宮（今の迎賓館）にあり、並ばないと入れない状態であったが、便利になったものだ。

しかし、これらの本の紙が酸性紙（現在は中性紙に改良された）で、100年は持たないそうだが、どうするのであろうか。天平・飛鳥の文化は残っても、現在の文化は残らないとは…。

